（別紙２）

審査の結果の要旨　　氏名　木村直樹

本論文は、日本近世の対外関係の成立過程を17世紀の東アジア世界のなかで政治史的に考察し、さらに対外関係を担った都市長崎の特質に迫ろうとしたものである。まず「序章」で近世対外関係史研究の課題を提示し、10章からなる論文を２部に編成している。

第Ⅰ部「十七世紀の東アジア世界と幕藩制国家」では、江戸幕府の17世紀の対外政策が、明清交替期の東アジア世界で活動する諸勢力と関連づけて論じられる。１章ではポルトガル船追放後の異国船対策を取り上げ、諸大名に海岸防備を命じるとともに、渡来船の船籍と来航目的を確認する対応策が家綱政権期に確立したと指摘する。２章は17世紀半ばのキリシタン禁制強化を大目付井上政重の活動から検討し、宗門改め役の成立過程を解明する。３章は明清交替期の東アジア海域における諸勢力の角逐と紛争への幕府の対応を論じ、来航船舶と琉球船の保護を基本方針としたと指摘する。４章は1673年にイギリス船が貿易再開交渉に来日した事件を論じ、オランダ風説書の情報が重要な役割を果たし、要求拒絶を通して西欧諸国との関係を固定化したと主張する。５章はオランダが日本に提供する情報について、取捨選択を経て作成されるオランダ風説書とそれ以外について論じる。

第Ⅱ部「幕藩制国家の対外政策と長崎」では、直轄都市長崎が江戸幕府の対外関係を担う諸構成要素から論じられる。１章は未解明であった長崎奉行との連絡調整にあたる長崎聞役の成立過程を熊本藩の事例で検討し、17世紀後半に長崎奉行との個別的な関係から吏僚的な関係に転換したと指摘する。２章は18世紀後半の幕府の長崎支配政策を論じ、長崎奉行により支配のあり方に差異が生じたことを明らかにする。３章では、1790年の貿易半減令が、完全実施に半世紀を要して貿易面にさしたる影響はなかったものの、通詞や地役人の再編成により長崎に大きな影響を及ぼしたことを解明する。４章は、長崎警衛担当の佐賀藩が18世紀後半に多様な関係を長崎と結び、オランダ通詞は語学力を向上させるとともに、貿易に絡むさまざまな関係を住民と結んでいたことをえぐり出す。５章は、18世紀後半のオランダ商館長ティツィングの日本史理解と馬場文耕の著作との関連を追う。

本論文の主要な成果は、①江戸幕府の対外政策の形成を、明清交替期の東アジア世界に登場する諸勢力とキリシタン禁制策との関わりで捉えることにある程度成功したこと、②オランダが提供した情報の作成と伝達の実態、およびその意義を具体的に解明したこと、③未解明であった長崎聞役の成立過程を一例ながら明らかにしたこと、以上三点である。

本論文は、オランダ語史料、幕府史料、西南諸藩の藩政史料を博捜し、着実かつ綿密な史料読解と分析を通して多くの新たな事実を発掘し、その成果を活かして近世対外関係史研究の進展に貢献している。しかし、第１部と第２部のつながりが未整理であり、18世紀への展望を描き切れていないところもあるが、本審査委員会は、上記のような顕著な成果に鑑みて、本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論を得た。